

3 各教科における学びを断片化させない工夫

キャリア教育は、すべての教育活動を通じて展開するものであり、キャリアを積み上げていく上で必要な知識等を、教科・科目等を通じて理解させる必要がある。教師はキャリア教育の視点を持って、学習内容と現在及び将来の生活を結び付けて、学ぶ意義を理解させることが大切である。

一方で、各教科・科目等における取組は、単独の活動だけでは効果的な教育活動にはならない。その取組の一つ一つについて、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それを結び付けたりしながら、より深い理解へと導くことも併せて必要である。つまり、学校全体でキャリア教育の共通の目標を持ち、各教科を「キャリア教育」でつなぐことで、各学校の特色・地域の特徴・生徒の実態等に応じた創意あるキャリア教育が実践されていく。

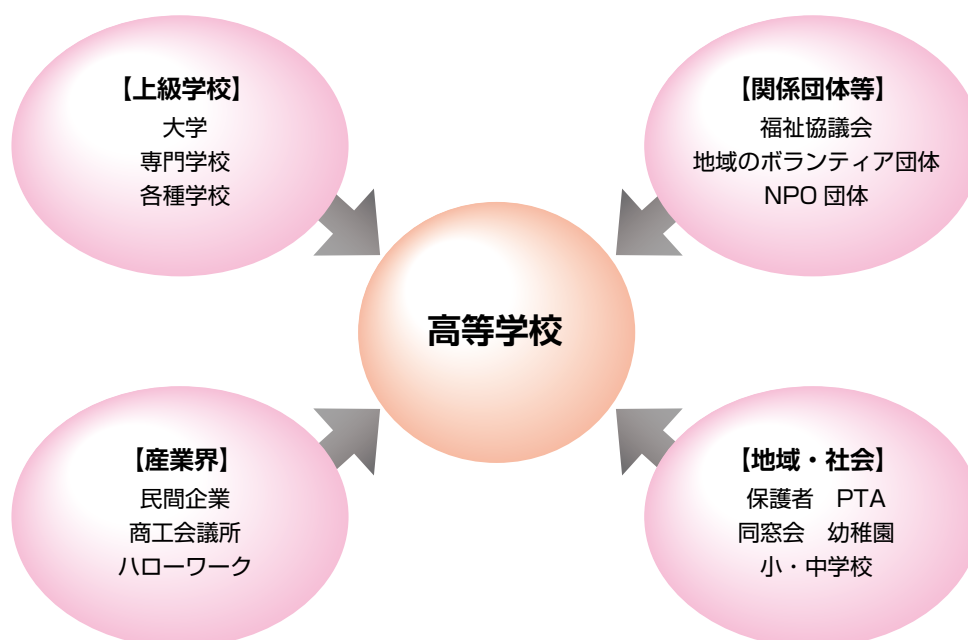
その際、総合的な学習の時間や特別活動（とりわけホームルーム活動）を活用することも重要な方策となる。「自己の在り方生き方を考えることができるようにする」ことを目標の一つとする総合的な学習の時間においては、「各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにする」ことが指導計画の作成の際に求められており、キャリア教育の中核的な実践の場とも言えるホームルーム活動においても、各教科・科目や総合的な学習の時間との関連を図ることは、指導計画作成の際の基本的配慮事項の一つである。

学習活動例



4 外部人材と共につくる系統的なプログラム

高等学校学習指導要領において「第1款の4」及び「第5款の4の(3)」では、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界との連携を図り、就業体験の機会を設け、地域や産業界等の人々からの協力を積極的に得よう求めている。キャリアの形成には、下図の例のように、学校を中心とし、家庭や地域の産業界及び関係諸団体との連携・協力を深めることで、より具体的な将来像の形成が期待される。学校以外の地域の方々との関わりは、円滑な人間関係の形成と自己の役割を考える機会となり、自己の将来像を考える上で有効である。高等学校段階においては社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力等を育成する必要がある。高等学校教育への進学希望者に対しても「大学等の向こう側にある社会」を意識させ、それぞれの将来について考えることが求められる。学校以外の外部との関わりは、より具体的で現実的な職業観・勤労観を育成する上で効果的である。そして、こうした子どもたちのキャリア発達にとって意義深い社会との関わりを広げていく取組が、さらに実り多きものとなるためにも、これらのプログラムをしっかりとキャリア教育の全体的な流れの中に位置付け、その事前事後にある活動と関連付ける系統性を高めていくことが、今、求められていると言えよう。



地域の教育環境，教育力を生かした活動

- ・ インターンシップによる地域企業での就業体験
- ・ 工場見学や上級学校見学，連携学習
- ・ 幼児，高齢者や障害のある人と交流し，ふれあう活動
- ・ 介護，福祉に関するボランティア活動
- ・ 図書館や博物館などの公共施設での学習活動
- ・ 伝統芸能の継承
- ・ 国際交流
- ・ 地域の年中行事や祭り
- ・ 社会人講話，社会的なマナー，ビジネスマナーなどの講話

<事例1>地域の大人に学ぶ就業体験学習 – A高等学校の場合–

<学校の状況>	<キャリア教育のねらい>
昭和50年代に開校した県立の全日制普通科高校で、学校のある市内及び近隣市町から通学する生徒が多く、地域に根ざした教育活動を行っている。進路希望は全体の5割弱が就職、次いで専門学校、4年制大学である。学習指導や生徒指導で課題を抱える生徒も少なくないが、学力向上、マナーアップ、進路実現などのために様々な取組をしている。就業体験学習もその一つである。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 就業等社会体験を実施することにより、勤労観、職業観を育成し、将来について考える機会を与える。 ○ 地域や企業の人たちとの交流を通して、社会性を育成するとともに規範意識の向上を図る。 ○ 社会体験活動を通して、その後の高校生活に目標を持たせ、自主的に活動できる生徒の育成を目指す。



地域と学校が連携してキャリア教育に取り組み、生徒の「生きる力」を育成する

(1) 活動の概要

地域の事業所や公共機関の協力を得て、高校1年生が10～11月に5日間、就業体験を行う。この活動のための指導は総合的な学習の時間に位置付けられ、5日間の体験活動のみならず、事前・事後の学習を含めて年間を通して行われる。事前学習は、自己を見つめ、自己の適性や進路について考える活動、社会体験をするに当たって必要なマナー、打合せや挨拶文の作成など多角的に実施する。事後学習では、活動の振り返り、礼状の作成や報告書の作成などを行う。

この活動は、地域の方々の協力を得て、次代を担う高校生を育成するという取組で、この活動を通して、生徒たちは、日頃の学校生活だけではできない経験をし、多くのことを学ぶことができる。

(2) 指導方針

- 実習先の選定
 - 商工会議所、ロータリークラブ、市役所等を窓口にし、企業、官公庁、福祉施設等に協力を依頼し、実習先を選定する。
- 実習内容の決定
 - 活動のねらいに沿って、安全管理に留意しながら、具体的内容は実習先と相談して決定する。
- 実習先への交通手段
 - 交通手段は、実習先の立地により各自が選択する。原則的に実習先は居住地の近くで、自転車使用又は徒歩が可能な範囲である。その際の交通費及び昼食代等については各自の負担とする。
- 教員による巡回指導
 - ・ 全教職員が巡回指導を行う。
 - ・ 1事業者について3回程度巡回する。
 - ・ 巡回担当者は、事業所と学校との連絡係として固定する。
 - ・ 巡回の際に評価表・アンケート等の依頼をする。
- 評価
 - ・ 総合的な学習の時間に位置付けて評価する。
 - ・ 実習日誌、実習先からの評価、巡回指導教員による評価や生徒の自己評価などにより行う。

(3) 指導計画

月	内 容
3～4月	・ 全体計画及び学習指導計画立案
5月	・ 生徒向け説明会 ・ 社会体験講演会 ・ 事業所開拓：ロータリークラブ、商工会、市教委などに協力を得て体験活動の実施を依頼、挨拶まわり
6月	・ 事業所リストの作成
7月	・ 事業所情報データベース化：受入れに係る情報をデータベース化
7～8月	・ 協力事業所との打合せ ・ 職員が事業所を訪問し、挨拶・打合せをし、生徒の割り振りや要望等を確認
9月	・ 保護者向け説明会 ・ 生徒による事前訪問：生徒が事業所を事前に訪問し、挨拶・打合せ
10月 11月	・ 生徒直前指導 ・ 体験活動（5日間） ・ 生徒事後指導：感想文・実習ノートの完成、事業所・保護者向けのアンケート、礼状の作成
12月	・ 事業所への御礼・挨拶
1～3月	・ 報告書の作成、送付

(4) 実施結果

月	内 容
4月	オリエンテーション：日程・概要説明 映像の視聴：NHK「あしたをつかめ 平成若者仕事図鑑スペシャル」 講演会：「仕事上の礼儀」「言葉づかい」
5月	自己をみつめる：進路適性検査 進路を考える：(次年度の)コース選択説明会 敬語を学ぶ
6月	講演会：「仕事上の礼儀」「社会のマナー」 自己紹介文を書く ①・②
9月	自己紹介文・挨拶文の完成 「社会のマナー」の学習、訪問・挨拶の仕方 「社会のマナー」の復習、事業所への電話のかけ方、お礼状の書き方
10月	講演会「社会のマナー」(講師：元キャビンアテンダント) 事業所訪問及び打合せについて、電話のかけ方(最終確認) 直前指導
11月	体験活動5日間
12月	体験活動のまとめ：礼状作成、実習ノートの整理、アンケート回答など
3月	報告・発表会

○ 受入れ事業所数

	福祉	幼・保・小	農業	消防	その他*	計
事業所数	20	17	9	2	12	60
受入れ生徒数(人)	63	44	32	16	30	185

* 製造業・小売店など

○ 生徒アンケート(抜粋)

1 就業体験を終えて、どのような感想を持っていますか。(複数回答可)

ア	将来について考えるきっかけとなった。	34.6%
イ	自分の適性を知った。	19.6%
ウ	地域の人々との交流ができた。	17.0%
エ	働くことの重要性を知った。	63.4%
オ	社会人の厳しさを知った。	37.3%
カ	あいさつの重要性を知った。	39.2%
キ	全く自分のためにならなかった。	3.3%

2 就業体験を終えて、今後の学校生活をどのように送りたいですか。最も当てはまるものを1つ挙げてください。

ア	もっと人間関係を大切にしていきたい。	84.3%
イ	将来のことを考えて充実した高校生活を送りたい。	43.8%
ウ	将来のために勉強を頑張りたい。	39.2%
エ	部活動や学校行事に積極的に励みたい。	81.0%
オ	校則だけでなく、社会のルールを守っていきたい。	10.5%
カ	今後、何かの資格を取得したい。	27.5%

○ 生徒の感想

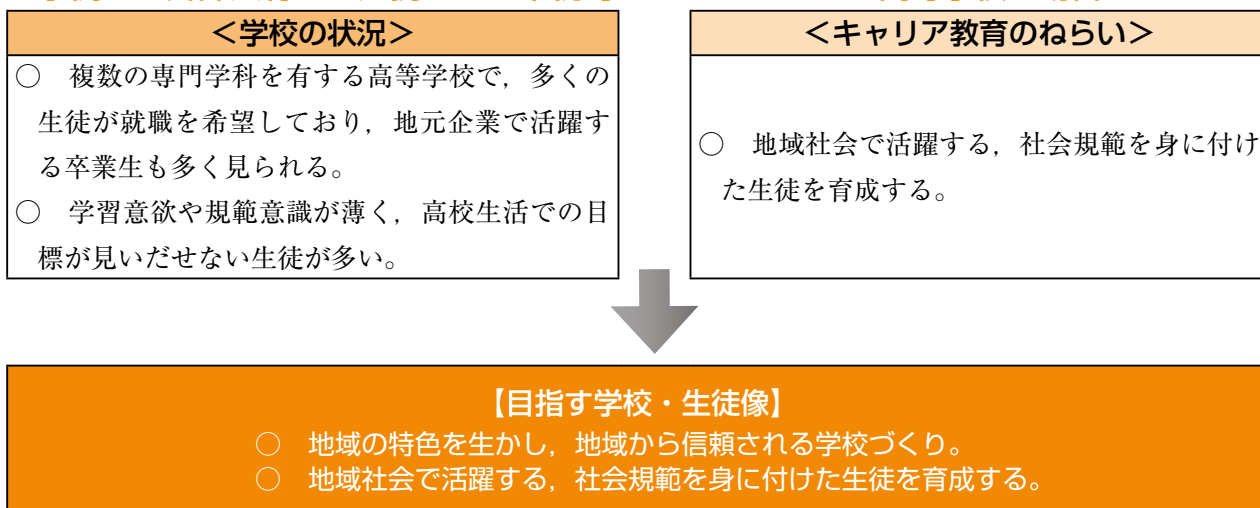
この5日間、本当に楽しくて充実していました。本当に保育士を目指すのもいいかなと考えました。もし、これから努力してなれるとしたら、保育士、幼稚園の先生など、子ども関係の仕事を目指してみたいと思いました。(保育園)
とてもいい経験をする事ができました。例えば、人工呼吸と心臓マッサージです。もし自分の身の回りの人が倒れてしまったら、みんなパニックになってしまうと思います。そのときに経験した僕が落ち着いて、119番とAEDを近くの人をお願いして救急車が到着する間に、人工呼吸と心臓マッサージをしてその人の命を助けたいと思います。そのほかにも、たくさんの方を経験させていただきました。この経験を忘れずに、これからの人生でもいつでもできるようにしておきたいです。(消防署)
このような体験をするのは初めてで、認知症の方との関わりは難しく苦勞しました。また始めは何をしたらいいか全く分からず積極的に動けませんでしたが。そういう中で利用者さんと色々な話をし、色々なことを教えてもらい、楽しいこともありました。これから社会に出るためによい経験をしたいです。施設の方も面倒をみてくださり、ありがとうございました。(老人ホーム)

() 内は体験先

(5) 成果

- この活動を通して、参加した生徒が働く喜びを実感することができた。
- 遅刻が減るなど基本的な生活習慣を正したり、コミュニケーション力を高めたりすることができた。
- 進路意識が高まり、将来について真剣に考えるようになった。その結果、学業に取り組もうとする意欲が向上した。

<事例2>外部人材との連携による系統的プログラム - B 高等学校の場合 -



(1) 学校全体での取組

B高等学校では、キャリア教育の全体計画を作成する過程で、これまでの諸教育活動の意義にキャリア教育の視点を取り入れ、教職員全体で再確認をした。学校全体としては①社会規範（頭髪・服装・挨拶・時間厳守）の全教職員での指導。②校舎及び教室内の清掃・整理による学習環境の整備。③学校と地元企業との協議会を開き、教育活動を公開し、意見交換する。④小・中学校との連携強化（「ものづくり出前授業」や学び直しのボランティア活動など）。の4点に取り組み、地域との関わりを重視しながら教育活動に臨んだ。

(2) 各学年における主な外部人材との連携一覧

	教育活動	活動内容
第1学年	職業人インタビュー	夏季休業中に身近な人から、職業についてのインタビューを実施し、職業観や勤労観を育成する。(総合的な学習の時間やホームルーム活動等で発表する)
第2学年	インターンシップ	地元の企業・公共施設などの協力で、3日間のインターンシップを実施する。体験を通し、職業観や勤労観を養い、自己のキャリア形成を考える。
	ビジネス マナー講習	企業の社員研修を行っている業者に依頼してプロ仕様のマナー講習を行うことにより、マナーの重要性を意識させ、以降の進路目標達成の意識の高揚を図る。
第3学年	社会人養成講座	金融に関する知識や人権問題への配慮など、社会人として身に付けておくべき知識等を関係諸団体から講話していただく。
全学年	弟子入りインターンシップ (第1・第2学年)	地元企業の協力で、希望者に対し、即戦力となる人材を育成することをねらいに、週1回1時間のペースで半年間企業にて技術指導をしていただく。
	工場見学・上級学校見学	具体的な進路を検討するために、学年ごとに職種や学校を分類し、複数の企業・学校を見学する。
	技能講習会参加及び各種 検定試験受験	外部講師を招き、検定試験に向けての実技講習を実施する。

外部人材との連携全体計画の一例

	第1学年	第2学年	第3学年
4月	ライフプラン作成①	ライフプラン作成①	ライフプラン作成①
5月	進路ガイダンス①	2者面談期間 進路ガイダンス①	進路ガイダンス①
6月		中学-高校連絡会	進路ガイダンス②
7月	ライフプラン作成②	3者面談期間	工場見学/上級学校見学
8月	社会人インタビュー		応募前企業見学
9月	進路ガイダンス②	工場見学/上級学校見学 進路ガイダンス②	就職試験解禁
10月	工場見学/上級学校見学	インターンシップ(Ⅰ期)	技能講習及び各種検定試験(通年)
11月	弟子入りインターンシップ(半年)	インターンシップ(Ⅱ期)	
12月		弟子入りインターンシップ(半年)	
1月	ライフプラン作成③	ライフプラン作成②	社会人養成講座
2月		高校と企業の協議会	
3月	進路ガイダンス③	進路ガイダンス③	ビジネスマナー講習

※着色部が外部人材活用。

(3) 成果

- 学校全体の教育活動の意義・関連付けが明確になり、教職員全体の指導体制が円滑化された。
- 外部人材との関わりにより、生徒が自己の将来像や職業観・勤労観を深めることができた。
- 地域からの視点・評価を取り入れることで、教育活動の改善点が早期に明確化することができた。



<事例3>企業との連携に基づいて作る系統的なプログラム - C 高等学校の場合 -

<学校の状況>

地域で長い歴史を持つ伝統校で、多くの卒業生が各界で活躍している。在校生のほとんどが大学への進学を希望する。また、同窓会の活動も非常に盛んで、母校に対して協力を惜しまぬ体制ができている。これまでも、そのような卒業生の講演会は行われていたが、3年間を通したキャリア教育の全体計画の中に系統的に位置付けられているものではなかった。

<キャリア教育のねらい>

- 「大学の向こう側にある社会」について理解を深める。
- 多くの人々が働く「企業」という組織の仕組みを知り、そこで働く人の思いや、どのような能力を活用して働いているのかを知ることで、高校時代、さらに大学時代を通して学ぶべきことや、現在の学習の意味について考える機会とする。



卒業生の力を借りて、生徒たちに「仕事」や「働くこと」についてのイメージを広げさせる。

(1) 活動の概要


高校1年生の主として総合的な学習の時間の中での活動である。まず、日本の産業構造について理解を深めながら、それぞれの産業が、どのような人たちの、どのような「仕事」によって支えられているかを考えるところから始める。その後、レディネステストによって、自分はどんな産業や仕事に興味・関心があるのかに意識を向け、職業に対する興味の幅を広げる。

こうした事前指導を踏まえて、卒業生の講話を聞く。この講話は、実際に多くの産業を支える企業で「働くということ」がどのようなことか、いわゆる「サラリーマン」と呼ばれる「仕事」が、実際にはどのようなものであるかを、生徒たちが知る機会とする。そして、それを踏まえ実際の職場でのインターンシップ、ジョブシャドウイング、インタビューなどへとつなげていく。

これらを踏まえて、1年生の後半は大学進学をの目的を少しずつ具体化できるようにしていく。3月には1年間の締めくくりとして、大学に在学中の先輩の話聞く。実際の学びの様子や学生生活についてイメージをふくらませ、2年生に向けて学習意欲の向上につなげる。さらに、2年生の修学旅行時に、班別行動として先輩のキャンパス訪問を行う活動へとつなげていく。



(2) 指導計画

月	プログラム	内 容
4月	産業・職業についての理解	日本の産業構造について理解を深める。どのような産業があり、それぞれの産業には、どのような企業があるのかを調べてみる。さらに、そのような産業が、どのような人たちのどのような仕事に支えられているかについて理解する。
5月	レディネステストの実施	自分が興味を持つ職業領域がどのような領域で、それらの職業と、ここまで調べてきた産業との関わりについて、更に理解を深める。
6月	会社の組織と仕事を知ろう	同窓会に協力を求め、企業で働く卒業生の方にお話をさせていただく。会社の組織や各部署での仕事の中身、さらに、そこで働くためにどのような能力が必要となるのか、また、それらが高校時代や大学時代の学習や経験とどのように結び付いているのかについて学ぶ。
6月～7月	インターンシップ等体験先企業への生徒によるアプローチと決定	自分が関心を持った産業から体験先を選定し、自らアプローチして体験先を決定していく。同窓会との連携の下、協力してもらえ卒業生がいる企業、医療機関、研究機関、行政機関などを対象としてリストアップする。生徒は、これらのリストの中から体験先を選び、自分で連絡をしてアポイントを取らせる。それ以外の企業を希望する生徒にも、直接アプローチをして、受入れを依頼させることも行う。(教員からも並行して連絡する)
8月～9月	インターンシップ、ジョブシャドウイング、インタビューなどの実施及び体験活動報告レポートの作成と発表	ここまでで学んだことをもとに、受入れ企業の許容する範囲で、職場での体験活動を行う。体験した内容について、レポートにまとめ、9月の文化祭において発表の場を設ける。
10月	学部・学科研究	ここまでの学習で自分が興味・関心を抱く仕事や産業を振り返り、その領域と関わる学問領域について調べたり、それとは別に自分が興味を感じる学問を探し、調べたりする。
11月	2年生に向けての科目選択進路希望調査	半年の学びを経た現在の進路希望を確認し、それを踏まえて2年生の科目選択に進む。
3月	先輩の話を聞く会	上級学校に在学中の先輩から、学問分野ごとに別れて実際の学びの様子や大学生活などについて話を聞き、イメージをふくらませる。それをベースに2年生に向けて学ぶ意欲の向上につなげていく。
 2年生の修学旅行での班別行動の中に先輩のキャンパス訪問などの自主行動へとつなげていく。		

(3) 外部人材との連携

キャリア教育のプログラムで行われている「職業調べ」学習は、ややもすると職業名のついた「仕事」に限定されがちである。このことは、逆に生徒たちの職業界に対する理解を狭め、時に「なりたいものや就きたい仕事が見つからない」という袋小路に追いつめてしまうことも起こりうる。

そこで、このプログラムでは、「サラリーマン」という言葉でくくられてしまう会社員という仕事に焦点を当て、会社で働くということの幅広さについて理解を深めるために、同窓会のバックアップの下、「会社という世界」、「会社で働く人の生き方」に触れる機会を設ける。そして、それを一つの柱として前後のプログラムに系統性を持たせるような工夫をしている。

高等学校における中途退学者に対するキャリア教育 (地域若者サポートステーション等との連携等について)

1 高等学校における中途退学者の現状

高等学校における中途退学者の現状は、文部科学省が毎年実施している「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」に詳しい。平成21年度の全高校生に占める中途退学者の割合は1.7%(実数5万6,948人)であり、ここ数年は減少傾向が見られる。

近年の厳しい雇用情勢の中で、高校を中退してしまった若者たちが、社会的・職業的な自立へと向かうことには困難が伴い、未就業の状態が長期化する者が少なくないと指摘されている。一方、高校中退後4年経過した若者への調査によれば、家庭の事情に関する心配や、生活リズムの乱れといった多様な悩みを抱えながらも、無業状態にある者の多くが高い就労意欲を持っていることが明らかになっている。

2 地域若者サポートステーション事業

若年無業者に対する職業意識の啓発や社会適応支援を目的として、厚生労働省は平成18年度から地方自治体と協働して地域若者サポートステーション(サポステ)事業を展開し、次のような取組を行っている。

- ① 支援対象者の把握
- ② 個別・継続的な相談の実施
キャリアコンサルタントや臨床心理士による心理カウンセリングなど支援対象者に応じた最適な支援を継続的に実施
- ③ 自立支援プログラムの実施
各種スキルの向上を目指したセミナー、ワークショップ、職場見学・職場体験など就労支援プログラムの提供
- ④ 保護者へのサポート
支援対象者の保護者に対するセミナーや個別面談
- ⑤ 他の若者支援機関等との連携
地域の若者支援機関、地方自治体、教育機関、保健・福祉機関、経済団体等との恒常的な連携

また、平成22年度からは「高校中退者等アウトリーチ(訪問支援)事業」が全国50箇所のサポステで実施されて、早期の段階から高等学校や家庭と連携して切れ目のない継続的な支援を行い、就労や就学(復学)の実現を目指している。

3 学校との連携と課題

現在、サポステは全国100箇所以上に設置されているが、既に高校と連携して中途退学者への支援を行っているサポステも少なくない。中には中退のリスクが予想される高校在学中の生徒も支援対象としているサポステもある。具体的には、①キャリアコンサルタント等による高校での個別相談会の実施、②高校の進路指導担当教員等との直接的な連携、③校内でのパンフレット配布、④教員向けのセミナー、ガイダンス、講演会の実施、⑤教員からの相談の対応、などが挙げられる。しかし、高校との連携ができていないサポステも見られ、学校との接点の持ち方の工夫が課題となっている。今後は高校への直接訪問や行政機関の協力による高校との関係づくり、教育委員会主催の教員対象講習会等の活性化が期待される。

(平成22年度地域若者サポートステーション事業高校中退者等アウトリーチ・ワーキンググループ 中間報告より)